

令和 2 年 4 月 15 日

海外特別研究員最終報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

採用年度 30

受付番号 201860628

氏 名

川野 恵子

(氏名は必ず自署すること)

海外特別研究員としての派遣期間を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。

なお、下記及び別紙記載の内容については相違ありません。

記

1. 用務地（派遣先国名）用務地：パリ第三大学（国名：フランス）

2. 研究課題名（和文）※研究課題名は申請時のものと違わないように記載すること。

17-18 世紀フランスにおける可感的言語体系の成立——身体言語と創造性

3. 派遣期間：平成 30 年 4 月 1 日 ～ 令和 2 年 3 月 21 日

4. 受入機関名及び部局名

パリ第三大学 ルネサンスから啓蒙時代にいたる形象と観念研究グループ (Formes et Idées de la Renaissance aux Lumières - EA 174)

5. 所期の目的の遂行状況及び成果…書式任意 **書式任意 (A4 判相当 3 ページ以上、英語で記入も可)**

(研究・調査実施状況及びその成果の発表・関係学会への参加状況等)

(注)「6. 研究発表」以降については様式 10—別紙 1～4 に記入の上、併せて提出すること。

本研究課題の目的

これまで劇論における身体言語の指示機能の問題は、同時代の修辞学復興ないし言語起源論の言語理論を背景に、模倣・伝達機能を軸に評価されてきた。しかしこれらの観点において身体言語は、抽象観念の正しい伝達を到達点とする知性主義言語活動の副次的存在にすぎない。本研究課題「17-18 世紀フランスにおける可感的言語体系の成立——身体言語と創造性」は、劇における身体言語の問題をリードした 17 世紀メネトリエと 18 世紀ディドロが、感性的認識及び表象を論じる「像(image)」理論の一部として演劇における身体を論じ、像理論というコンテクストから身体言語を積極的に評価していたことに着目し、これらの像理論が身体による言語活動を取り上げながら、知性主義に包摂されない感性主義に立つ新たな言語機能を論じていたのではないかという点を浮き彫りにすることを目的とする。以下、メネトリエとディドロに分けて研究の実施状況を詳しく述べる。

遂行状況と成果

メネトリエ

メネトリエ (1631-1705) はリヨンのイエズス会コレージュにおいて、神学及び人文学の教育・研究に従事した修道士である。劇としての舞踊を定義する舞踊論『劇の諸規則にしたがう新旧のバレエについて』(1682 年)を著し、これはとりわけ 18 世紀バレエ・ダクシオンの理論家に参照され、大きな影響を与えた。メネトリエは、舞踊論の他に紋章論や音楽論を著し、それら一連の著作は「像の哲学」と総称された。本課題はイエズス会修道士であるメネトリエが、神という原型と像を結び、原型と像の絶対的ヒエラルキーを重んじる神学的な伝統に身をおきながら、世俗的な像を「気晴らし」として積極的に認め

た点に着目し、メネトリエはどのように神学的伝統と対峙し、神に依拠しない像の自律的な価値の論証に至ったのか分析することで、その像理論の解明を試みた。

メネトリエは宗教的な目的を持たない世俗的な像を「気晴らし」として肯定したが、この「気晴らし」は、メネトリエの属するイエズス会と激しく対立したジャンセニストによってとりわけ厳しく糾弾された。そこで比較検討のため、ジャンセニストの像理論にあたったところ、とりわけパスカル(1623-1662)の「表徴(figure)」理論と呼ばれる一種の像理論のなかに、メネトリエの像概念を読み解く鍵を見出した。

パスカルに関する先行研究を調査した結果、神学において、現世を神の隠れる象徴的謎と解釈する伝統的な思想があった。さらに17世紀においては、謎を成す地上と天空の象徴関係が、旧約聖書と新約聖書の象徴関係に読みかえられ、これは今日にはほとんど消滅したこの時代に独特の「表徴(figure)」概念を作り出した。その表徴概念とは、旧約聖書に描かれる出来事は、新約聖書の出来事の預言であり、旧約は新約の「表徴」だというものである。とりわけパスカルはこの概念をキリスト教の証明のために重用し、さらに絵画の図像の存在論に結びつけた。パスカルにおいて、「原物」の写しである「図像 (figure)」と未来に起こる神の出来事を間接的に指示する「表徴 (figure)」とが存在論的に不完全なものとして同一視されたからである。

西洋の伝統的な像理論「自然模倣論」、あるいはメネトリエの思想的背景としてしばしば指摘される「神人同形論」どちらにおいても、像とは、原像に限りなく接近し、原像を明晰に表すことを使命とする。しかしこの17世紀の表徴理論は、表すというよりはむしろ、「隠す」という特異な像の在り方を示す。闇昧に隠すというこの思想は、メネトリエの像理論の根本的な解明を促した。メネトリエは1694年の『謎めいた像の哲学』のなかで、まさに表徴理論を論じ、隠匿するという神学的像概念の影響下にあることを示す。しかしメネトリエは、パスカルのように像を原像と比較して存在論的に不完全なものとはみなさない。そうではなく、隠匿する像概念のなかに、〈表されるもの／神〉と〈表すもの／像〉の間に類似というよりは差異を作り出して隠そうとする制作者の巧妙な「精神」と「技」を認め、この隠す「精神」と「技」が像の成立の要因であると定義した。つまり、メネトリエは神と像の間の絶対的ヒエラルキーを、原像と模像の差異を際立たせる作者に焦点をあてた像理論へと組み替えることで、像の価値を、原像ではなく、像を制作する者の精神と技術へと位置付けた。このようにしてメネトリエは、神に依存しない像の自律的価値を論証することに成功した。

本研究の結果、メネトリエの像理論の基盤には、像は神を隠匿するという当時の神学の伝統的な思想があり、対象を隠匿する精神と技を像の成立要因として応用していることが明らかになった。この分析は、メネトリエや当時の身体言語論の解明に新たな視点を与えた。17世紀の絵画論において、徐々に人間の顔の表情や身体の動きに内面的な情念の表れを見る思想が広がっていく。その代表例はシャルル・ル・ブランによるアカデミーでの講演録『感情表現に関する講演』(1688)であり、この中で人間の怒りや喜びなどの内面的な情念が顔の表情にどのように表れるのかについて論じられた。この情念という原像と顔の表情という模像の接近性を根拠に、とりわけ18世紀以降、絵画の領域においても演劇の領域においても、身体は情念を真実らしく模倣することができると主張され、さらにその模倣表現は分節音言語による模倣よりも勝るとさえ論じられた。しかしメネトリエは、1694年に早くもル・ブランの表情論に言及し、この理論を自然模倣論というよりは、自身の隠匿する像理論から全く異なる考察を提示する。それによれば、身体とは内面的な情念を隠し、したがって身体に現れる表情を見る行為とは隠されたものを見抜くことであり、ル・ブランの絵画の卓越性は、「自然の模倣」を目標としているのではなく、隠された「魂を見えるよう」にした点にある。無論、芸術上の一大パラダイムを「模倣」とするこの時代のメネトリエの功績は、他の舞踊論者に先駆けて舞踊による「模倣」の定義に取り組んだことであり、これは18世紀舞踊論に大きな影響を与えた。ただし、本研究から、メネトリエの像理論には神学理論を応用した何らかの対象を隠す、それを見抜くという精神と技の働きから成立する像概念が根底にあり、一般的な原像と模像の一致を志向する模倣理論とは異なった視点で身体による模倣・伝達を捉えていたと考えられる。

ディドロ

バレエ・ダクシオンの動向など、劇における身体言語の使用が本格化する18世紀に、ディドロはいち早く演劇におけるパントマイムの重要性を理論化し、演劇改革を試みた。本課題ではディドロについて、大きく分けて以下二点について考察した。1)演劇論を執筆する直前に著された1751年『聾啞者書簡』の

中で論じられる言語起源論の分析、2)「シミュラークル」概念の検討を中心とした1750年代後半の演劇論の分析。

1) 『聾啞者書簡』言語起源論の分析

ディドロが像の指示機能をいかに論じているのかという課題を解くために、『聾啞者書簡』に着目した。その理由は、18世紀における身体の言語化と言語起源論は密接な関係にあるが、ディドロ自身1751年『聾啞者書簡』において、詩的言語を言語の到達点に置く特異な言語起源論を展開しているものの、その身体言語の問題は同時代のコンテキストから検討されるばかりで、内在的にはそれほど詳察されていない。そこでディドロの言語起源論を詳細に分析し、身体言語の指示機能はいかに論じられているかディドロの理論から明らかにすることを試みた。

ディドロは『聾啞者書簡』のなかで、言語が身体という感覚を媒体とする段階から、分節音言語という知性を媒介とする段階へと展開し、明晰性を獲得していく様子が描かれる。ただし一方でディドロは、同時代の言語起源論の明晰性を到達点とする進歩史観からは距離をとり、分節音言語に至った先に、さらに言語の「完全な段階」を追加する。ディドロはこの段階の特徴として「ヒエログリフ」を定義する。ディドロによれば、言語が感性の段階から知性の段階に進化するに従い、徐々に品詞が完成し、言語は明晰な指示機能を獲得する。しかし言語は明晰性を獲得すればするほど、言語を生成する生き生きとした魂の状態からは乖離し、言語記号という「冷え冷えとした複製」に過ぎなくなる。しかし、芸術作品に起こる詩的な言語活動は、「ヒエログリフ」と呼ばれる像を生成し、この像は言語の限界を乗り越えることができる。なぜなら、芸術家が言語活動のなかに巧妙に仕組む「ヒエログリフ」は、言語の指示対象そのものを言語の受け手に感覚させるという独特の指示機能を持ち、読み手の魂には、対象を認識する話し手と同じような生き生きとした運動が起こるからである。つまり、ヒエログリフにより言語は、話し手の魂の冷たい「複製」という地位を脱却することができる。複製性という言語の限界から解放されているがゆえに、ディドロはこの詩的な言語を、言語の最も完成された段階として位置付けた。

『聾啞者書簡』から数年後、1760年代後半にディドロは立て続けに演劇作品と演劇論を対にして、演劇に関する著作を発表する。そこで、『聾啞者書簡』の分析に基づいて、演劇における身体言語(視覚言語)の問題にいかに応用されているのか考察した。1760年代後半の演劇論で、ディドロは役者の身体を台詞に還元する古典主義演劇を批判の対象として設定し、パントマイムが大量に導入することで、身体が視覚言語として前面に押し出そうとする演劇改革を主張する。ディドロは、古典演劇の慣例、すなわち俳優が観客を正面にシンメトリーに整列するという慣例は、なぜ改められるべきかを説明するために、絵画と比較しながら、演劇作品の指示対象である行為と生きた人間という媒体の接近を指摘する。人間の行為を「絵の具」という媒体で指示する絵画と、人間の行為を生きている「人間たち自身」という媒体で指示する演劇が比較され、指示される対象と指示する媒体は演劇の方がはるかに接近することが強調される。身体が絵の具に劣らず、むしろ絵の具にまして、描こうとする対象に接近するのであれば、演劇作品において視覚言語「パントマイム」として活用しない理由はない。こうした理念が、ト書き概念が確立していない時代において、大量のト書きがパントマイムを指示する演劇作品『私生児』(1757年)及び『一家の父』(1758年)に結実したと考えられる。このようにディドロは、言語歴史観の完成期の特徴であるヒエログリフにおいて、指示対象そのものを感覚させることで、言語の記号性を乗り越えることが企図したが、このディドロにとって身体とは、パントマイムとして視覚言語化される時は劇の行為(action)という指示対象そのものと限りなく一致し、ヒエログリフの生成の契機である指示対象をいわば現前させることのできる稀有な媒体であると考えられる。

2) 「シミュラークル」概念を中心とした演劇論の分析

上記のヒエログリフ概念に加えて、「シミュラークル」概念の考察を行った。シミュラークル概念は一連の演劇に関する論考の最終章、すなわち『劇詩論』(1758年)の末尾に登場し、ここでディドロはアリストという哲学者を登場させ、アリストの独白という形をとって、近代経験論以後の哲学の困難さを論じる。それによれば今日の哲学の基礎を成すのは、神の知性と不滅とは無縁の有限な人間の身体であり、この有為転変する身体を認識の基礎にして、さらにその対象を、現象的な自然に据えなければならない。ただし、変遷する認識主体と対象という以上の二重の困難にもかかわらず、ディドロは懐疑主義の立場は取らない。流転する身体によって現象的な自然を認識することから、その根本原理や模範の構築が尚必要であると主張し、人間が構築しうる模範を「観念的模範(modèle idéal)」と呼んだ。このディドロの芸術思想の根底にあると考えられる観念的模範は、しばしば芸術制作については「シミュラークル」とい

う特異な術語によって言い換えられる。そこで、ディドロの身体と芸術に関わる本研究課題の解明のために「シミュラクル」概念の分析を試みた。具体的には、演劇論の「シミュラクル」概念を『絵画論』(1765 年)に論述される同概念との比較を行った。というのも、演劇論におけるシミュラクルとは流転する認識主体と対象に応じて可変的な制作概念である一方、古代ギリシャ・ローマを主題とする『絵画論』第四章においては、「永続的シミュラクル」という対立的な性質をもつ概念として登場し、この対立を検討することが、この概念の解明に寄与すると考えたからである。

『絵画論』においてディドロは古代ギリシャ・ローマの芸術を分析し、詩人と芸術家(画家や彫刻家)、そして鑑賞者の間には「作用」と「反作用」の関係を認める。ディドロによれば、ホメロスのような詩人が、最初に神々の歴史を描き、この歴史の中で描かれる神々の身体的特徴は、その後の芸術家がこれらの神々を描くときには必ず描きこまなくてはならない必須の特徴となる。なぜなら、芸術家の制作する作品を見る鑑賞者は、ホメロスの描写する神々の物語をいわば聖書として読み、この聖書に描かれる神々の身体的特徴をその神々を主題とする芸術作品に見つけることに快を覚えるからである。このように古代ギリシャ・ローマの芸術は、詩人の描く言わば「異教の聖書」が芸術家や鑑賞者の制作や鑑賞を限定していることを指摘し、こうした三者の「作用」と「反作用」の固定的関係を構築する古代の神々を「永続的シミュラクル」と称した。

以上の「永続的シミュラクル」論の考察は、これと対立する流動的なシミュラクルを論じる演劇論において、ディドロは繰り返し、「われわれ」つまりディドロと同時代人である 18 世紀を生きる人々を古代人とは神々の信仰という観点において区別して考えていることに着目させる。この演劇論においてディドロは、近代経験論哲学の成果を、古代から続く形而上学の伝統を形而下に転換したこととし、同様の改革を現代の演劇にも求める。ディドロにおいて、もはや地上に神々は存在せず、したがって、古代ギリシャ・ローマの人々が信仰していた神々の描写は、本質的に現代の鑑賞者には適当ではない。ディドロにおいて、現代の鑑賞者の作品への「関心」を本質的に喚起するために要請されるのは、新しい信仰の対象として「ブルジョワ」の生活そのものを描くことである。

以上の演劇作品制作における近代的要請を達成するために、古代ギリシャ・ローマの神々に限定されるシミュラクルを、現代の生を取り込みうる生成的なシミュラクルへと変える必要がある。ディドロは経験論哲学の主要な方法である「観察」を応用し、世界の「観察」、それもとりわけ、職業や感情によって刻々と変化する「人間の身体」の観察に基づいて、芸術家の制作の源泉である「観念的模範」ないし「シミュラクル」を絶えず修正していくことを提案する。周囲の環境や自身の状態に応じて絶えず変化する身体像の観察する近代の芸術家は、そのシミュラクルを変化させることで、彼らを取り囲む世界を芸術作品の中に取り込むことが可能とする。したがって人間の身体とは、永続的なシミュラクルを現代の世界に開かれた生成的なものとし、演劇作品に新たな世界そのものを構築する源として機能していることがわかる。

以上の「ヒエログリフ」および「シミュラクル」概念を中心とした考察は、ディドロの演劇における身体の導入について以下のことを明らかにする。身体を演劇に用いようとする時、その重点は、言語の発信者のメッセージをいかに正確に伝達するかというよりは、言語の受け手である観者の関心をいかに喚起し、またいかに言語の生成に参加させるかという点に置かれている。このことは、パントマイムという身体表現の演劇への導入にあたり、模倣伝達とは別の言語機能をディドロは目論んでいたことを示す。すなわちディドロは身体言語を演劇作品に導入することで、観客に対して一方的にメッセージを放っていた演劇作品を、観客自身が言語の生成に参加する相互的な存在へと改革しようとしたと考えられる。

まとめと今後の研究の展望

本研究はメネトリエとディドロという連続的に検討されることがあまりない哲学者を、像理論を背景に身体言語について論じているという共通点に依拠して、相互的な検討を試みた。その結果、メネトリエにおいては「表徴」理論ないし隠匿する像概念、ディドロにおいては「ヒエログリフ」概念にあらわれている通り、両者の像への関心の根底にはある表象の伝達性というよりは、表象それ自体の生成に観者がいかに関与するかという問題があり、それが身体論に応用されていることが明らかになった。概要に記した通り、本研究は知性主義的な言語活動とは別の感性的「言語」の体系を浮き彫りにすることを目的とした。ただし、本研究を遂行する過程で、メネトリエやディドロは、本質的に制度的であるがゆ

えに複製性を免れない「言語」の表象上の限界を越境することに関心があり、彼らは身体による演劇を問題にしながら、身体に「言語」性を求めるというよりは、むしろ身体が「像」であるからこそ生じる表象の新たな様態を探求していたのではないかという結論に至った。こうした視点は、メネトリエやディドロばかりではなく、この時代の様々な演劇身体論に重要であるといえる。とりわけ古代ギリシャ・ローマ演劇におけるパントマイムの存在は 18 世紀演劇における身体言語復興の一つの契機としてこれまで論じられてきたが、演劇における身体表象を言語と捉えるのか像と捉えるのかという違いは、当時の古代パントマイム論に対立を生じさせた原因であったのではないか。この古代演劇論に関する対立は、カユザックによるデュボス古代演劇論批判に顕著であり、両者の比較検討に着手するところまで研究を進めた。この比較検討をまとめ、さらに 17-18 世紀の演劇身体論全体を包括的に再検討することを今後の研究上の展望とする。

成果の発表・関係学会への参加状況

メネトリエ

発表

KAWANO, Keiko, "Ménestrier's Theory of the Dance as Drama: Origin of the Ballet d'Action",
20th Annual Oxford Dance Symposium: Dance and Drama, New College, Oxford University, 4/2018.

論文

川野恵子「隠す精神と技——メネトリエ『謎めいた像の哲学』考」『形象』第4号、形象論研究会、
2019年、55～69頁。

ディドロ

論文

川野恵子「ヒエログリフと演劇：1750年代のディドロ」『美学』第70巻第1号、美学会、2019
年、13～24頁。

発表

KAWANO, Keiko, "Le silence dans le drame selon Diderot", *Séminaire international des jeunes dix-huitiémistes: Le silence au XVIIIe siècle dans les arts, l'histoire et la philosophie*, La Société Internationale d'Etude du Dix-Huitième Siècle(SIEDS), Università della Tuscia, 9/2018.

川野恵子「ヒエログリフと演劇-1750年代のディドロ」『日本フランス語フランス文学会 2018 年度
秋季大会』新潟大学、2018年10月。

KAWANO, Keiko, "Pantomime in Diderot's drama", *21th Annual Oxford Dance Symposium: Reading Dance*, New College, Oxford University, 4/2019.

KAWANO, Keiko, "Pantomime and imagination: Diderot's reform of drama in the 1750s",
15th International Congress on the Enlightenment, International Society for Eighteenth-Century Studies (ISECS), Edinburgh University, 7/2019.

KAWANO, Keiko, "Éveiller l'intérêt du public selon Diderot ", *Journée d'étude Scènes publiques, intérêts privés : L'interpénétration des systèmes de production théâtrale*, INHA, 3/2020. (COVID-19の影響で中止。原稿を主催者に送付。)

アウトリーチ活動ワークショップ

川野恵子、中島那奈子、山森裕毅「詩とダンス・ワークショップ〈沈黙の語り〉」出演協力：ぱくきょん
み(詩人)、山田せつ子(ダンサー)、岡元ひかる(ダンサー)、大阪大学文学研究科・大阪大学 CO デザイ
ンセンター、大阪大学豊中キャンパス、2019年3月9日。